

すぎなみ大人塾 2020 荻窪コース

新・荻窪はっけん伝～今だからこそ 知ろう・つながろう・伝えよう～

実施日時：2020年12月12日 場所：消費者センター

学びの案内人：高橋明子（株式会社エンパブリック）

ゲスト：「荻窪の記憶」 荻窪の記憶プロジェクト・松井和男

司会: 本日は荻窪コース第4回にお越しいただきましてありがとうございます。まち歩きに行かれた方も、残念ながら行けなかった方も、こうやって顔を拝見し、たいへん嬉しく思います。

今日ご講演いただきます松井和男さんのおじいさま、佐々木邦さんは、大正時代に荻窪を舞台にした『好人物』という小説を書かれました。松井さんご本人は荻窪地域区民センター協議会でご活躍され、荻窪地域区民センター設立40周年行事として、『荻窪の記憶』の出版に主導的な活動をされた方です。今日は『荻窪の記憶』の冊子もお手元に配らせていただいていますので、冊子の内容を中心にお話しいただきます。

高橋: 今日もよろしくお願ひします。ご紹介にありましたように、本日ご登壇いただく松井さんは『荻窪の記憶』をまとめられた方です。その中身を含めて、荻窪地域のお話をじっくり駆け足でご紹介いただきたいと思っております(笑)。今日は他に何をやるかは、まずは松井さんのお話をうかがってから、そのあとでご紹介をさせていただきます。松井さん、よろしくお願ひします。

松井: 松井と言います。荻窪は、中央線沿線の住宅地の代表というイメージがあると思いますけれども、住宅地としての荻窪がどうして誕生したかという話をまず一つ目にします。

それが終わってから、まちの「歴史」と「記憶」についてお話をしたい。歴史っていうと、何かすでに書かれて定まったものみたいな気がする。また、記憶っていうのはもうちょっと曖昧で、生きているものかなという気がします。そういう歴史あるいは記憶が、その土地に住んでいる人たちにとってどんな意味があるのかとか、まちづくりといわれるようなものとのどういう関係があるのかという話を、二つ目としてしたいと思います。

平成30年3月、杉並区立郷土博物館分館の区民参加型展示のときに作成したチラシをお配りしていますが、荻窪は「明治のエリートたちに別荘の適地として見いだされ やがて大正の自由な風が吹く 緑ゆたかな郊外住宅地へ」と発展していったというリード文が書いてあります。こういうものはなるべく見たいと思ってもらわないといけないので、こういう書き方をしたのですけれども、ひとつのストーリーとして住宅地・荻窪がどのようにして生まれたのかを紹介した展示でした。

住宅地の誕生というストーリーで荻窪の歴史を紹介したものは、いままでなかったのではないかと思います。古い話はすでに調べられているのですけれども、このようなひとつのストーリーにすることで分かりやすくなる。よく「ブラタモリ」でも最初に、「今日のテーマ」って出しますよね。あれと同じで、

僕はずっとテレビの番組を作っていて、こうやってテーマを示すことを「闘争宣言」と言うのですが、こういうのをぱっと打ち出すことによって、どういうふうはこの番組を見たらよいかという心構えが視聴者にできる、そういう意味もある。

それから、もうひとつ、荻窪の歴史について。この展示の特徴としては、場所を絞っているということですね。荻窪といってもそれなりに広さがあるのですが、一番多くの人になじみがあると思われる大田黒公園の周辺に的を絞って、そこから荻窪に住宅地がどうして誕生したかっていう歴史を語って、いこうという展示でした。お配りしている小冊子に詳しい内容が書いてあるので、また後で読んでいただければよいと思いますが、大きな流れをご紹介しておきたいと思います。

これは大田黒公園周辺ですよ。「大田黒公園周辺地区」は都市計画上の区分なのですが、たまたまそのエリアにほぼ集中して文化財があったり、歴史を語るものがあったりということで、この地域をよく見れば荻窪がどうして生まれたのか分かるというふうに私たちは考えたわけです。

次は荻窪地区の説明に入ります。荻窪に限らず東京の郊外、いまの山手線の外は武蔵野だったわけですね。武蔵野っていうと国木田独歩も書いていますが、基本的には畑と雑木林から構成されています。その雑木林っていうのはほとんどが落葉樹の林で、冬になって葉が落ちると、その枯葉を集めてそれを堆肥にして、畑を豊かにしてきたのです。もうひとつは木を切って、薪や炭にしたのです。だから、武蔵野っていうのは江戸に食料や燃料等を提供していたのです。そんな収入もあり、農家は暮らしていたのですけれども、そういう農家が武蔵野をずっと覆っていたわけですね。荻窪もその例外ではないと思います。

武蔵野のひとつの農村に過ぎなかった荻窪に、明治 22 年に甲武鉄道という鉄道ができるわけですね。かなり早い時期に近代化が訪れる。そして2年後の、明治 24 年に荻窪駅ができます。そういう形で近代化と触れたわけですが、基本的に明治になっても農村の生活っていうのは変わらなかった。

明治の半ば過ぎぐらいから、いまの山手線内の旧市街に住んでいる人たちの中から、荻窪に土地を買う人が現れました。最初に土地を買ったのは菊野七郎さんっていう人ですが、菊野さんはフランス語の研究者でした。蘭はオランダのことですが、蘭学じゃなくて仏学っていうか、フランス語のエキスパートだったわけです。明治になって西洋の知識を導入するときに翻訳が必要で、そこで活躍した人ですね。その人が最初に荻窪に土地を買っている。翻訳した『陸軍歩兵操典』がベストセラーになり、その印税で荻窪に数万坪の土地を買いました。現在の区立中央図書館がある場所、その一部でした。

次に、明治 30 年代に、倫理学者の中島力造さんがいまの荻窪 3 丁目に数千坪の土地を買っています。彼は同志社の第一期の卒業生で、アメリカのイエール大学で勉強して帰ってきて、東大で倫理学

を教えている。だから明治のエリートっていうか、西洋のものを日本に持ってきて、日本の近代化を進めたひとりです。

明治 40 年から 42 年にかけて、大田黒公園周辺地区、あるいは隣接した土地を買った人に内科医の入澤達吉がいます。のちに荻外荘(てきがいそう)と呼ばれるようになった土地を最初買った人ですね。彼はお医者さんで、ドイツのベルツというお雇い外国人が教えていた東大で勉強して、自分もドイツに留学して、ベルツに代わって東大の医学部で活躍して、大正天皇の主治医もした人です。

それから、その隣の土地を買った人に山田直矢っていう方がいました。彼は大久保利通の甥御さんで、やっぱり東大を出て、ドイツに勉強しに行って帰ってきて、三井鉱山に入社し三池炭鉱専務理事になった方で、日本のエネルギーを開発するために活躍した人です。

みんな、明治時代の日本の近代化を支えた人たちですね。そういう人たちが荻窪の土地を買った。当時荻窪に土地を買っても、汽車は数時間に一回しか来ないので、通勤はできないのです。だから、あくまで別荘的な土地として買っている。この時代は鎌倉とか葉山とかね、向こうの方は完全な別荘地帯になっているのですね。それはさっきの入澤達吉の先生であるベルツ先生が、オゾンが体にいいとか、そういう大気療法を応用した生活を勧めたからです。日本も当時ようやく工業化していくわけですが、当時の燃料は石炭ですから、もうすごいスモッグだったと推察します。ということで、そういう中でやっぱり健康に良い海辺に別荘を持つという動きが出てきて、それが必ずしも海岸じゃなくてもいいということになって、わりと近場で、行こうと思えばすぐ汽車で行ける荻窪あたりもそういう意味で別荘地として注目されたということだと考えています。

次に、明治 43 年のガイドブック、『中央東及び西線川越線青梅線鉄道名所』です。明治の終わりに出版されたもので、将来有望な場所をいろいろ紹介している。ここに「荻窪駅は、東京市に近く且つ市内と異なり因塵至らず」とあります。スモッグというかね、そういう汚れた空気がここまでは来ない。「大気の清涼は健康に適せり」ということで、「都人士の別荘(べっしょ)を設くるものあり」と。別荘というのは別荘のことですけども、市街地に住む人々の間から荻窪に別荘を設ける人も出てきている、だから、いまに発展するというふうなことが書かれている。そういうふうには、荻窪の宅地化というのは別荘から始まったということです。

さっきの入澤達吉先生の奥様ですけども、彼女は当時の人にしては先見的というか、合理的な考えの持ち主でした。入澤家は日本橋に一時いたことがあるのですが、当時の日本橋とか下町の方っていうのは非常に住環境が悪くて、家が建て込んでいて陽が当たらない。そういうところは子どものためによくないというので、当時の甲武鉄道は蒸気機関車で飯田橋から出ていたんですけども、それに毎週末乗って、子どもを日光浴させるために荻窪まで来ていたというふうなことが思い出として書かれている。そういうことから類推して、前に紹介したような人たちが荻窪に土地を買った理由というの

は、ひとつには健康のためであった。それだけ萩窪は空気がいいところだったということが言えると思います。

もうひとつ萩窪に別荘が生まれた理由というのがあるのですけれども、それは地形ですね。善福寺川があって、萩外荘のところが高台になっています。これは善福寺川が土地を削って河岸段丘となっていて、台地が残っているわけです。この台地の端っこに立つと、下の低いところが全部田んぼになっていて、その向こうに松林が見えたり、富士山が見えたり、非常に眺望がよかったわけですね。武蔵野台地は比較的平らですから、こういう眺めのいい場所っていうのは貴重ですね。そういうこともあって、この辺に別荘が増えたということになるわけです。

これは昭和15年の写真です。入澤先生から近衛文麿に家が譲渡され、西園寺公望により「萩外荘」と名づけられた。その萩外荘の前に、田んぼがあるでしょう。広い田んぼだったんですね。入澤さんが昔のことを思い出して「自分の家からから田んぼが見えて、部屋の中にいながらにして田植えをしている姿が見られる」ということを書いている。さっき紹介した明治のエリートっていうのはみんな地方の出身ですよ。子どものころに身近に田んぼがあったので、田んぼがあるのが非常に嬉しかったらしいですね。萩窪が別荘地化していったひとつの理由は、田んぼがあったから、ということも言えるのです。

これは大正8年ごろの下萩窪の地図です。下萩窪はいまの萩窪4丁目あたりですけれども、これがのちの環八ですよ。これが中央線です。山田別荘とか、入澤別荘とかがありますが、大田黒元雄はまだ来ていません。前田別荘、床次別荘、こっちは平野別荘です。そういう別荘があって、それ以外は全部農家ですね。この時代は本当に何も無いっていうか、ただの農村にぽつぽつと別荘があるという状態です。農家は、この頃は全部茅葺きですね。瓦屋根の家は一つもない、別荘ができるまでは瓦屋根はなかった。萩窪地域は大正時代の半ばぐらいにようやく電気が来るか来ないかというふうな時代です。だから、大正時代の半ばまで萩窪は、ぱっと見た限り珍しいものもない農村だったということです。

これはあとでちょっと話に出てきますけれども、萩外荘のあたりっていうのは、お不動山と呼ばれていた。当時武蔵野では、林のことを山って言っていた。だから、その辺はもうほとんど雑木林だったということですね。

萩窪の別荘のひとつに床次竹二郎という人の別荘がある。彼は有名な政治家で、いろいろな大臣を歴任している。この写真は彼の建てた洋館ですが、写っている人は次の代の住人です。

それから当時、入澤さんの奥さんに連れられた息子さんが毎週末萩窪に来ていたわけですが、その息子さんの回想によると、当時の萩窪駅は駅舎があって、他にはそば屋一軒だけ、あとは何もなかった。軽井沢みたいなおとろだったと言っているわけです。軽井沢も当時はこういう田舎で、外国人などの別荘が点々とできたわけで。そういう意味で萩窪も軽井沢みたいだった。

もうひとつ面白いのは、昔の地主さんのうちに嫁いだお嫁さんから話を聞いたのですが、そのお嫁さんが義理のお母さんから聞いた話として、当時こういう別荘のひとつの近くまで行くとね、白い服を着てテニスをしている人たちがいて、まるで自分たちとは違う別世界みたいだと思ったそうです。

実際、荻窪の山田別荘には、テニスコートが2面ありました。この写真は、ちょっと時代は後になるのですが、テニスをこれからするのか、もう終わったのか分かりませんが、テニスウェアの人たちの写真です。こういうふうにはテニスコートがある家もあつたりして、当時周りはほとんどまだ農村ですから、かなりの別世界が農村の中に生まれていたということです。

だんだん時代が進んでいきます。これは杉並区の人口の増加を表したグラフですが、赤いのが杉並村、青が井荻村です。杉並村っていうのは、今の天沼、阿佐谷、高円寺の辺りです。今の駅の南側、上荻窪、下荻窪、そういうところは井荻村だった。

『杉並区史』の人口の推移を見ると、大正9年ぐらいから人口が急増しています。日本が工業化していくと、東京に人が集まってくるわけですね。そのころサラリーマンという言葉も生まれてきて、そういう人たちが住むところを求めてだんだん郊外に出ていくわけです。そういう動きがすでに大正10年前後から始まっているのです。東京に近い方からだんだん宅地化していくので、杉並村っていうのはかなり急カーブで人口が増えていった。そういうところに大正12年に追い打ちをかけるように関東大震災が起きて、都心にもうなかなか住めなくなる。みんな、安心して暮らせる郊外に出ていく。荻窪の場合は井荻村ですから、震災まではあまり増えていないですね。震災後、増えていくわけです。

これは杉並区立桃井第二小学校の開校当時の校舎の写真ですけど、人口が急に増えたので、学校も足りなくなっちゃうのですね。この頃学校がいっぱいできていますけれども、桃井第二小学校もそのひとつです。保護者の職業を調べると、それまではほとんど農業だったわけですけど、この時代になると、新しくできた小学校の保護者はほとんどサラリーマンです。当時の保護者の職業ですけど、農業が40人に対して、会社員、官吏、工業、これは工場で働いている人、それから教員とか軍人とか、銀行員、そういう給料生活者が137人。40:137で、圧倒的に給料生活者が多いことになります。要するに、荻窪地域がだんだんベッドタウンになってきたってことですね。農家の人は自分のうちに住んで働くわけで、給料生活者の人たちはもう職住分離で、仕事は都心でして、住むところは荻窪ということになるわけです。それを可能にしたのは、鉄道が蒸気機関車から電化されたり、その運転間隔が短くなったりということにあったわけです。

杉並村に比べると、井荻村は宅地化のスピードが遅れていたのが、震災後も農地がほとんどだったんですね。そういう時に、井荻村の内田秀五郎という賢明な村長さんが、このまま放っておくと無秩序な町ができちゃうと考えました。いまも世田谷区だとか、荻窪も天沼の方も、道路が入り組んで目的地に着くまで苦労しますよね。道路を整備する前にどンドン家が建っちゃって、そうすると農道がそのまま道になっていますから、非常に分かりにくい道になる。そういうことに危機感を覚えて、道路をちゃん

と整備したまちづくりをしようということで、大正 14 年から徹底した区画整理をやるわけです。大田黒公園周辺もその範囲に入るので、道路が整備された。

荻外荘ができたのは、昭和に入っすぐのことでした。入澤先生は大正天皇の主治医をしていましたので、大正天皇が亡くなるまでは御用邸のある葉山の別荘に住んでいたのですけれども、そのあとリタイアして、自分の終の棲家としてこの屋敷を建てました。それがいまの荻外荘になるわけです。

同じころできたものに、西郊(せいこう)ロッジという高級下宿があります。西郊という言葉も西の郊外で、まさに荻窪なんかは西の郊外。西郊という言葉はやっぱアピール力があって、みんなの憧れの場所であったという証拠だと思います。

当時のまちがどうであったかというのをお話します。この空撮写真は戦後すぐに撮っているのですけれども、荻窪は戦争ではほとんど被害を受けていないので、戦争が始まる前の状態だと思えばいいんですね。そうするといまの大田黒公園に当たるところとか、かなり黒く見えるのは木ですけれども、緑の多いまちが生まれている。下の方に田んぼがありますよね。他のまちと比べて非常に緑の多い地域になってきているというのがよく分かると思います。西郊ロッジとか大田黒公園とか、山田邸、さっきテニスコートがあったところですね、それから荻外荘、床次邸、さっき言った政治家の家ですけれども、ここはいま塚本総業の公邸になっています。

では、この町に、どういうコミュニティができたか、どういう人たちが住んでいたかという話ですけれども、実業家の人たちのほか、作家・文学者の人たちも住んでいました。石井桃子や阿川弘之です。阿川弘之の場合は学生時代に住んでいたのですね。東大の文学部に行っていた時にここに住んでいて、1941 年 12 月 8 日、日本がパールハーバーを攻撃した日米開戦の臨時放送はその下宿で聞いている。杉並区役所で徴兵検査を受けて海軍に入るので、だから、何て言うのかな、日米開戦だとか、そういう大きな記憶と個人の記憶というのがクロスしていく。例えば、阿川さんの場合は、そこでラジオで聞いて涙が出たというふうなことを書いていますね。

それから、次。ちょっと変わったところでは皇室関係の人も、割と荻窪に住んでいます。今の上皇が小学校に入った時に担任だった秋山幹先生だとか、それから上皇の名「明仁」の名付け親になった芝葛盛(しばかずもり)がいたりとかですね、そういう皇室関係の人も結構多かったです。軍人も何人もいます。

それから、文化人っていうか、荻窪はわりと自由人、そういう人が多く、吉田秀和という音楽評論家がいますけれども、彼が「大田黒元雄は大正リベラリズムの申し子のような人だった、教養人だった。」というのを書いています。ある意味では非常に好きなことをしてね、自由に生きた人たちが多かった。舞踏家の石井獏の公演を見て目覚め、ドイツでモダンダンスを学び、帰国後は荻窪でバレエ教室を開いた執行正俊(しぎょうまさとし)も大田黒元雄と親交がありました。

それから甲野勇も在野の考古学で、「縄文三羽鳥」と言われた人ですね。考古学は、戦争中は神国日本と結びつくことを求められたわけですが、彼はそういうことに反旗を翻して、在野ですとやってきた。そういうわりと自由な人が多かったっていうのも、ひとつの特徴かもしれません。

写真は、木版画の近代化に貢献した恩地孝四郎という版画家の家です。いまも半分だけ残っていますけれども、その隣に住んでいたのが漫画家の田河水泡で、そのうちに下宿していたのが長谷川町子。そういうふういろんな人がいました。

こういうふうにして、荻窪のまちができた、できていったわけですが、その間には近代の帰結として、最終的に太平洋戦争に行きつくわけですね。近衛さんが、第一次近衛内閣ができたときに荻外荘を譲られて、住むようになって、すぐ日中戦争が始まるわけでしょう。そのあと、今度は第二次近衛内閣のときに、すぐ荻窪会談という重要な会議が開かれて、そこからまた日本は太平洋戦争にどんどん向かっていく、そういう昭和史とも荻窪の歴史は重なります。そこからさらに戦後があるわけですが、荻窪のまちっていうのは戦前にある程度、今の原型みたいなのができたということが分かっていたらいいと思います。

荻窪の歴史っていうのは日本の近代化の歴史を背景にしてある。だから、荻窪だけで物を見るのではなくて、日本の近代の歩みと噛み合っているわけですね。そういうふうに見ていくと、また面白いと思います。

日本が近代化していく、つまり農業国が工業化をしていく中で、都市にだんだん人が集中して住むようになって、サラリーマンが生まれてくる。こういう動きは日本だけじゃなくて、イギリスなどの外国もみんな同じですよ。だから、住宅地の田園調布を造るときに、イギリスに行って、視察して、田園都市ができる。郊外に人が住むというのがその時代から始まっているということです。そういう意味では、近代という大きな流れの一環として荻窪のまちも生まれている。

もうひとつ、地域を絞って見るっていうのも面白いのです。今回の講座では、荻窪のひとつの象徴として大田黒公園周辺部を扱っていますが、天沼は天沼で、天沼の歴史があって、そこから見ていくと、やっぱりそれぞれのまちの個性っていうのが見えてくるんですね。まちはそれぞれ個性があるから面白いので、まちをぶらぶら歩く甲斐があるし、まち歩きっていうのもそこから生まれてくるかなと思います。

それから、いま言ったような歴史っていうのは、自分たちのおじいさんとか、ひいおじいさんとか、そういう時代の歴史ですから、ある種の懐かしさっていうのも非常に大きなファクターとしてあると思うんです。

荻窪の記憶と言いましたけれども、記憶というか、歴史でもいいのですが、そういうものがどういう意味があるのかということ考えたときに、町っていうのは空間だけじゃなくて、時間と空間が合わさっ

てできているわけでしょう。よく荻窪のまちづくりって言うと、南北をどうやって結んだらいいか、そういう話ばかりになっちゃうのです。町には時間の積み重ねとか歴史とか、そういうものがある。あるフランスの地理学者が都市性という言葉を使っているのですけれども、都市にはそれぞれの性格があるわけですね。そういうものは空間からだけじゃ分からなくて、時間軸を入れて考えないと分からない。だから、もっと大事にしていかななくてはいけないのではないかと思います。

そういう記憶が宿る場所っていうのがあって、やっぱり昔のものが残っていると、そこから記憶っていうのが広がって行くわけですね。東山魁夷が「古い家のないまちは思い出のない人間と同じだ」って言っていますが、古いものを残していかないと、記憶っていうものも非常に空疎な、寂しいものになっていく、なかなか宿れない。そういう記憶があることによって、まちっていうのが、目には見えなけれども豊かになっていくということだと思うのですよね。だから、荻窪のまちづくりって言ったときに、時間軸を忘れちゃいけないということです。

それともうひとつ。まちづくりっていうのはコミュニティがあって初めて成り立つと思うのだけれども、町の歴史を共有することで、そのコミュニティの一員という自覚や同じ土地に対する愛着心が生まれてくる。それがないと、なかなかコミュニティっていうのは成り立っていかない。コミュニティを成り立たせるもうひとつの条件、共有できるものとして、町の記憶っていうものがあるのではないか。そういう意味でも町の記憶を大事にして、何らかの形で伝えていきたいということです。

そういうふうにと考えると、まち歩きもいろいろ楽しみ方があって、ただその場所を説明するのではなくて、その場所からある時代にタイムトリップすると、非常にイメージが広がる。例えば、かつら文庫の場所は石井桃子がもともと住んでいたところですが、その時代っていうのは昭和ですね。昭和の初めのころ、彼女は出版社に勤めていました。当時、女子大を出て出版社に勤めるっていうのはかなり進んだ女性で、言ってみればモダンガール。彼女もその一員だったわけですね。だから、冬になれば友達とスキーに行くとかね。そういう意味で、かつら文庫からそういう時代に飛んでみるとか。そういうふうにいるいろいろ遊べるっていうかな、そういうことも面白いのではないかと思います。

司馬遼太郎は、ある国を理解するのに一番いいのは、その国が生まれた原型っていうか、おおもとを見て、それと今を比較するのが一番よく分かるって言うのです。アメリカの国の成り立ちについて、司馬遼太郎が実際にアメリカを歩いて考えている TV 番組があります。その時点では司馬遼太郎も我々私も、トランプ大統領みたいな人が出てくるなんて予想しなかったのですけれども、そういう観点から見ると面白いかもしれません。

以上で駆け足になりましたけれども、お話を終わりたい。質問があったら、どうぞ。

参加者：私は今、本天沼に住んでいるのですけれども、主人の実家の叔母から「昔宮様のおうちが近くにあったよ」というふうに聞いているのですがご存じでしょうか。

松井:それは本日お配りした本『荻窪の記憶』の第二章、「天沼 100 年の歴史」にも書いてありますけれども、賀陽宮恒憲(かやのみやつねのり)、明治になって新しくできた宮家の別荘がありました。今はね、都営住宅、児童公園がありますよね。賀陽宮という宮様はなかなか面白い人だったらしくて、野球が好きだった。アメリカに旅行したときにベーブ・ルースにサインをもらった宮様です。

高橋:松井さん、どの位の時間をかけてこの冊子をまとられたのですか。

松井:まあ、わりとのんびりやりました。

時間があれば、映像をお見せした方がよかったですけれども、大田黒公園の向かいに渡辺さんっていうおうちがあるんですね、広いおうちが。渡辺さんっていうのは新日鉄の社長をしていた方ですけども、奥さんの実家っていうのは甲野さんっていう家で、両家の人たちがあの一角に住んでいた。その人たちが、たぶんその中で一番長老のおばあさんの喜寿かなんかのお祝いの時に集まって、野外パーティーをしたりした映像がある。当時の映画フィルムは9.5ミリっていう、8ミリの前に出たものです。この間、『スパイの妻』っていう映画があったでしょう。9.5ミリフィルムで撮影する小型映画があつた時代流行したのですね。さっき言ったそのパーティーが主ですけども、それ以外にも荻窪の風景だとか、そういうものが映っている。昭和12、3年ぐらいのことですよ。日中戦争のころだと思うんでね、始まったころ。

高橋:私も見たのですけれども。何て言うのですか、庭球っていうのですか。

松井:そうそう、毬。バスケットボールのまねごとをしているのですけれど。あれを見ると、日中戦争が始まって国民がどんなに暗い気持ちで暮らしていたかと思うのですけれども、実はもう非常に明るいね。このムービーは僕がDVDを持っているので、見たければお知らせください。

高橋:そうですね。優雅ですね。

松井:天真爛漫な。とにかく、これは別な話になっちゃいますけど、日中戦争で南京陥落のときはもうデパートで大安売りしたりしてね、巨人が優勝してバーゲンするようなものだった。一般人達は暢気にしていた。戦争が始まるまで、こんなことになるなんて誰も思っていなかったと思います。

参加者2: 荻窪と二・二六事件って深いつながりがあるのではないかと思います。そのことももう少しお話しいただけますか。

松井:荻窪とつながりがあるわけじゃなくて、荻窪に渡辺錠太郎っていう陸軍大臣が住んでいたのです。それは上荻の、いまで言うとお蕎麦屋さんの本むら庵の近くですね。彼は二・二六の反乱軍にとってはメインターゲットじゃないのですよね。主たる標的じゃないのだけれども、他のところがうまくい

かなくて、荻窪に来て、渡辺錠太郎を殺害した。あのときのことを覚えている人は結構いますよね。銃声が、かなり遠くまで聞こえたらしい。久世光彦というドラマのディレクターがいますけれども、彼は子どものころ阿佐谷に住んでいて、銃声が聞こえたとかなんとかって書いている。だから、かなりこの辺の人はね、みんなその音を聞いていると思いますね。

当時、渡辺錠太郎の娘さんはまだ小さかったのですが、それを目の当たりにしたわけでしょう。彼女は雙葉学園に通った後にシスターになって、ノートルダム女子大の総長になって、つい最近亡くなった。特に荻窪だからってということではない。ただ荻窪は軍人が多かったことは確かです。